

LIBRA SQUARE

Book

最近、おもしろかった本

『エキスペリエンツ7 団塊の7人』

堺屋太一 著 日本経済新聞社 1995円（税込）

“団塊の世代”通して 戦後・現在・未来の日本を考える

東京近郊の小さな駅前商店街。そば屋も菓子屋も仏具屋も、バブル期には皆こぞってビルを建築。しかし、バブル崩壊により残ったのは、返済地獄。銀行による不良債権処理は商店の閉店を意味し、商店街の客足は徐々に減る。すると、残された商店の売上も減少、閉店を余儀なくされる。店舗が歯脱けの「シャッター通り」は、ますます客足を遠ざける。客足の回復を狙ったイベントや新商品は、一時は功を奏するものの、長続きはしない。「街全体」を造り直さなければ、解決にならない。

本書は、現在、数多く見られるこうした小さな商店街を舞台に、理想の街造りの一歩を踏み出す物語である。

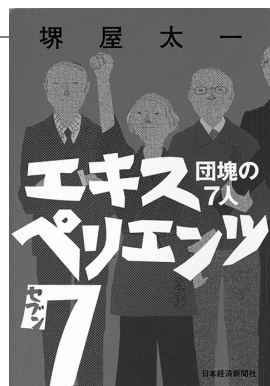
主人公は、大企業のエリートではなく、酔狂な大金持ちでもなければ、面白いことに、この商店街に縁のある人物でもない。早期退職した無職の元銀行員（56歳）と、彼の呼び掛けに応じて結集した建築家やイベントのプロ、元商社マ

ン、NPO代表など経験者達（エキスペリエンツ）である。しかも、全員が「団塊の世代」。

「団塊の世代」とは、終戦直後の1947年から1949年にかけて出生した人々の世代を指す、かつて著者が命名した言葉である。この3年間に生まれた日本人は、その直前よりも20%、直後よりも26%も多い。官僚や識者の間では、近い将来、団塊の世代の大量引退により深刻な労働力不足と年金破綻が同時に起こるだろうといった悲観論、いわば「団塊お荷物論」が叫ばれ、マスコミでも盛んに取り上げられている。

知識と経験と行動力を持ったこの団塊の世代が、お荷物になろうはずはなく、むしろ、これからも数々の流行と需要を生み出し、新しい概念と社会構造を創造するに違いない。こうした理念のもと書かれた本書は、物語としても、戦後・現在・未来の日本を考える上でも面白い1冊である。

（会員 福崎 真也）



『オペラ座の怪人』

2004年／アメリカ／ジョエル・シュマッカー監督作品

人生経験を積んだ後に 再度出会いたい作品

芸術とは縁遠い私であるが、「オペラ座の怪人」とは意外にも付き合いが長い。

1988年に劇団四季がこのミュージカルの日本初公演を行ったとき、当時高校生だった私は、友人とふたりで大阪上本町・近鉄劇場の最前列のど真ん中という素晴らしい席で、この舞台を「体験」した。高校生の頃には、「愛するが故の悲しみ」などというものを理解するほどの人生経験もなく、ただミュージカルの華やかな舞台と壮大な楽曲に感激し、「怪人」のクリスティーヌへの歪んだ愛（とその当時は思った）と執着心に、恐怖にすら近い感情を覚えたのである。

その後、2005年1月に本作がロードショー公開された際には映画館に行くことはできなかったが、最近になって偶然にも本作のDVDを見る機会に恵まれた。最初の出会いから17年という歳月を経た後に本作を見たわけだが、今までの「怪人」に対するイメージが完全に覆され、「怪人」のクリス

ティーヌへの愛に感動の涙を流してしまった。本作にはロマンチックな演出が随所にどこかされているということもあるが、これはやはり私自身の人生経験によるものが大きいと思う。

私も年齢を重ね、それなりの恋愛経験を積み、人が人を愛するカタチは人それぞれだし、愛には時間が必要なときもあるのだということを学習してきた。愛のために「怪人」が犯した殺人は正当化できないが、人を愛するがゆえに何かを犠牲にすることは、その愛が真剣であれば必然であるだろう。そして、クリスティーヌは「怪人」ではなく子爵を選んだわけだが、クリスティーヌを失ってからが「怪人」の真実の愛の始まりであり、その真実の愛を貫いた「怪人」はクリスティーヌを愛した唯一の者とも言えるのではないかと思うのである。

また、私が年齢を重ね、人生経験を積んだ後に再度出会いたい作品である。

(会員 池田 一二奈)

『オペラ座の怪人』DVD
発売元：アーティストフィル
ム/ギャガ・コミュニケーションズ/スタイルジャム
販売元：メディアファクトリー
価 格：3990円(税込)
品 番：ZIMBY-2301

